

## 「評価価値観」はいかに定義され、いかに構造化され得るか —非母語話者の謝罪文を評価する場合—

宇佐美 洋

### 要旨

評価という判断行為は、評価者の「価値観」によって支配されているが、従来の研究において「価値観」という概念の定義は不十分であった。本論では、評価を支配する「価値観」という概念（およびその関連概念）に対し明確な定義を与えるとともに、非母語話者が書いた謝罪文を評価する際に用いられている価値観を、「心情重視—合理性重視」「規範の厳格運用—開放的運用」という2つの軸により構造化する試みを行った。

〔キーワード〕 心情、合理性、評価規準、規範の厳格運用、規範の開放的運用

### 1. はじめに

宇佐美 (2014a) では、日本語母語話者が「日本語学習者が書いた謝罪文」を評価する際にどのようなプロセスをたどっているかを、12名の協力者に対するインタビュー等によって詳細に検討した。そのうえで、評価プロセスの多様性と普遍性をともに表現するために、「評価プロセスモデル」を作成する試みを行った。さらに、参加者が自らの評価のあり方を内省し、他者の評価との違いに気づいていくことを目的とする評価ワークショップの手法を提案した。

しかしながら宇佐美 (2014a) においては、主として「評価が行われている手順」に焦点が当たっており、そうした手順を支配しているはずの「評価者の価値観」のありようについては十分な検討ができていなかった。

筆者は宇佐美 (2014a) 刊行後、この書籍で提案した評価ワークショップを、大学での授業や日本語教育関係者に対する研修において多数開催してきた。本論ではこのワークショップで得られたデータ等を踏まえ、評価者が評価を行う際に準拠している「価値観」の全体像についての考察を行う。

### 2. 評価と価値観

#### 2.1 評価の定義

宇佐美 (2014a: 2) では、「評価」を以下のように定義している。

主体がもつ内的・暗黙的な価値観に基づいて、対象についての情報を収集し、主体なりの解釈を行ったうえで、価値判断<sup>1</sup>を行うまでの一連の認知プロセス。またその結果として得られる判断。

ここで「評価」は、「教えたことの習得の度合いを見積もる」とか、「教師をはじめとする権力者が、対象者の能力や行動の成果を一方向的に値踏みする」というような狭量な意味ではなく、「日常の社会活動の場においてだれもが行っている、基本的な認知行為」として広くとらえ直されている。そうすることで評価研究を、単なるテストの技術論ではなく、「人間探求のための手がかり」（宇佐美 2016）へと広げていくことが企図されているのである。

## 2.2 価値観とは何か

ただし宇佐美（2014a）においては、「価値観」という語を明確に定義してはいなかった。上掲書では、「個人が、他者の（あるいは自分の）言語運用に対し価値判断を行う際の基本的考え方」のことを「評価ビリーフ」と呼び、この語が「価値観」と近い意味で使用されていた。しかし「基本的考え方」という表現はいかにもあいまいであり、要するに「価値観」の概念設定は不十分なままにとどまっていた。

そこで本論ではまず、従来の諸研究の中で「価値・価値観」という語がどのように扱われてきたかを一覽したうえで、本論において「価値観」をどう定義するかについて論じる。

### 2.2.1 価値・価値観の定義

「価値 (Value)」を定義したおそらくは最も初期の文献として、Kluckhohn (1951) が挙げられる。Kluckhohn (1951: 395) において「価値」は、“A value is a conception, explicit or implicit, distinctive of an individual or characteristic of a group, of the desirable which influences the selection from available modes, means, and ends of action.” 「明示的または非明示的に、個人を区別した集団に特徴的な概念であり、行動様式、手段、目的の選択に影響を及ぼす欲求の概念（筆者訳）」と定義されている。また Rokeach (1973:5) は価値を、“A value is an enduring belief that a specific mode of conduct or end-state of existence is personally or socially preferable to an opposite or converse mode of conduct or end-state of existence.” 「ある特定の行為様式や存在の最終状態を、個人的または社会的に、その反対の様式・状態よりも好ましいものとする持続的な信念（筆者訳）」としている。いずれも「価値」を、評価・判断を行う主体である個人（や集団）に存する「概念」あるいは「信念」としてとらえている。

一方で見田（1966: 17-19）は「価値」を、「主体の欲求<sup>2</sup>を満たす、客体の性能」と定義し、「価値」は客体側にあるものととらえる（ただし価値は、その現実的な基盤を「人々の欲求」と関連付けられており、「人々の意識から独立した客観的属性」ではなく「人々の欲求に由来する主観的属性」であるとされる）。そしてまた、(1) 価値に対応する主体の側の要因、(2) 客体それ自体、は価値そのものからは概念上区別されるべきとし、(1) を「価値意識」、(2) を「価値体」ないし「価値客体」(the valued or value-object) と呼んだ。

要するに見田は価値を、主体（ここには個人も社会集団も含まれる）が主観的に見出す属性であるにとらえながらも、その属性はあくまでも客体側に存するものとしている。そして客体側に「価値」を見出す主体の側の要因は、「価値意識」として、「価値」とは区別すべきであると主張する。

ここでは英語の value という語が、客体側に存する属性であるとも、その属性を望ましいものと認める主体側の信念であるとも解することが可能<sup>3</sup>であるため、この両者を明確に区別することを求めたものと考えられる。一方で日本語では、「客体側に望ましさを見出す主体側の信念」は、「価値」というよりはむしろ「価値観」（見田のいう「価値意識」）と呼ばれ、この点での混乱はあまり起こらないものと考えられるが、しかし英語の value がそのまま「価値」と訳されてしまうとやはり混乱は避けられない。「価値」は「客体側の性能」であるということの確認は、どうしても必要なものであったといえるだろう。

## 2.2.2 「価値観」を定義するにあたっての問題点

本論においては、「価値」と「価値意識（価値観）」は区別して扱うべき、という見田（1966）の主張には賛同しつつ、「客体側の性能」としての「価値」ではなく、客体側に望ましさを見出す「主体側」にあるものとしての「価値観」を主たる考察の対象とする。

現代においては、文化的・言語的に多様な出自を持つ人々が、同じ社会の中で共生していかなければならないというのは避けられない趨勢である。そのような中で、ある固有の性能を持っているはずの同一の客体<sup>4</sup>に対し、ある者は望ましさを認め、別のある者は望ましさを認めない、という事態はごく当たり前になり得る（同一の主体が同一の客体に対し、ある場面においては望ましさを認め、別のある場面では望ましさを認めない、ということもあり得るだろう）。現代社会においては、客体がどういう性能を持っているかというより、個々の人間がその客体の性能に対しどのような意味づけをしているかということのほうが、より重みをもつにいたっているといえる。その意味づけの様態の多様性と、そして可能であればその背後に存在する一般性を見出していこうとする試みは、異なる文化的・言語的出自を持つ人々が同一社会の中で共生していくための重要な手掛かりとなるだろう。

前述のように宇佐美（2014a: 2）では、「評価」を「主体がもつ内的・暗黙的な価値観に基づいて、対象についての情報を収集し、主体なりの解釈を行ったうえで、価値判断を行うまでの一連の認知プロセス」と定義していた。ここから逆算するならば「価値観」とは、「主体が、対象についての情報を収集し、解釈を行ったうえで、対象の「望ましさ」についての判断を行うにあたって準拠する『なにものか』」、ということになるが、この「なにものか」の部分に定義を与える際には、以下に示すようないくつかのことが問題になるように思われる。

### (1) 価値観は「信念」か？

第1の問題点は「価値観」を、Rokeachのように、単純に「信念」と定義してしまっ

いか、ということである。

ここで仮に価値観を「信念」と定義するのであれば、それは多少なりとも意識的な存在であることが想定される（無意識的に行っている行動を「信念に基づく行動」とは呼びにくいだろう）。しかしながら現実問題として、ひとが評価を行う際、その評価が無意識的な要因によって影響を受けている、ということもあるように思われる。

例えば言語教師の中には、学習者作文に見られる言語形式上の誤りは極めて詳細かつ厳密にチェックしようとするものの、主張と根拠の間、また根拠と根拠の間の論理的な整合性についてはほとんどまったく見ていない、という者が存在する。これは、「論理性」という観点を意識的に排除しているというよりは（そうしたケースも皆無とは言えないが）、そもそも「論理性」という観点自体を持っていない、という蓋然性が高い。

ひとはある情報を、有用だと思うからこそ収集しようとするのであり、その情報が有用であるという発想自体がなければ、情報の存在が意識にのぼることすらなく、当然その収集がなされることはない。おそらくこうした教師は、作文において「言語形式上の誤りは望ましくない」という信念を持っているために、言語形式上の誤りに関する情報を重点的に集め、それに基づく解釈、価値判断を行う一方で、「論理的な不整合は望ましくない」という信念を持たないために、論理的な不整合に関する情報収集自体を行っていないものと考えられる。

つまり評価は、ある信念が「存在する」ことによってだけでなく、「存在しない」ことによっても影響を受ける。このことを考えるならば、評価に影響を与える価値観を、単純に「信念」と定義してしまうことは適切ではない（少なくとも誤解を招く）ように思われる。「価値観」には「意識的でない要因」も含まれる、ということをも勘案して定義を定めるべきであろう。

## (2) 価値判断同士の競合を調整するものは何か

第2に考慮すべきことは、評価を行う際、異種の観点についての価値判断同士が競合することがあり得る、ということである。

例えばここに、「言語形式上の巧みさには欠けるが、主張と根拠との間の論理的整合性は取れている文章」と、「言語形式上は巧みに書けているが、主張と根拠との間の論理的な整合性が取れていない文章」があったとする。「言語形式上の巧みさ」「論理的な整合性」の両者をともに好ましいと考える主体が上記2種類の文章を読んだとき、果たしてどちらのほうをより高く評価することになるのだろうか。

その主体は、「言語形式」「主張と根拠の間の論理的関係」という2つの観点の間に優先順位をつけ、より優先される観点に対しより鋭敏に反応することになるものと考えられる（現実には他の観点も絡み、より複雑な過程をたどるものと思われるが）。

なおここで「観点」とは、「客体の『望ましさ』について判断を行おうとする際に、それについて情報を集めようとする領域を概念化したもの」と定義することができる。この「観点」について「望ましいと思われるあり方」を概念化したものが「評価規準」（「評価基準<sup>5</sup>」で

ないことに注意)であり、ここでいえば例えば「言語形式に誤りが無い」「主張と根拠との間に論理的な整合性が取れている」などの記述がそれにあたる(さらに言えば、「ある観点について、ある状態・結果を望ましいと信ずること」が、評価に当たっての「信念」であり、ある状態・結果が、単に「望ましい」だけでなく、「そうあるべきだ」「そうすべきだ」という「当為 Sollen」の意識と結びついたとき、それは「規範」と呼ばれることになるだろう)。

このように考えるならば、同一の「観点」について異なる「評価規準」が設定される可能性もあることが理解されるだろう。例えば「言語形式」という観点について、「誤りが無い」ということを規準とすることも、「使い方の難しい言語形式が適切に使用されている」ということを規準とすることもあり得る。つまり、同一観点について異なる規準同士が競合し、規準同士の間での優先順位が問題とされることもあるのである。

さらに観点同士、規準同士の優先順位は決して固定的なものでなく、場面や相手によって順位が入れ替わる、ということもあり得るだろう。例えば、一般的な文書においては言語形式上の誤りには比較的寛容な評価者が、謝罪文や依頼文のように、読み手の心情に直接働きかけるような種類の文書においては、言語形式上の誤りに対し非常に厳しくなる、ということがある。このように、場面や相手によって観点が切り替わったり規準の範囲(許容できる範囲)が伸縮したりすることは、一般に「ダブルスタンダード」として批判的にみられることが多い。しかし例えば、「学習者の習熟レベルに応じて、言語形式上の誤りに対する反応の鋭敏さを変える」ということのように、教育上一定の意義を持つと考えられるダブルスタンダードもあり得よう。

このように考えてくると、評価を支配する「価値観」は、「ある観点について、ある状態を好ましいと考える(=評価規準とする)信念」だけではなく、観点・評価規準同士の優先順位を決定したり、また場面や状況に応じてその優先順位を変更したりする「なにものか」によっても構成されているということになる。

### (3) 「価値判断」と「価値観」の違い

最後の問題点として、「価値判断」と「価値観」とは果たして区別できるのか、ということが挙げられる。

ここで「価値判断」とは、客体の「望ましさ」に関する判断であり、「価値観」とは、その「価値判断」に到るまでのプロセスを支配する「なにものか」であるわけだが、この「価値観」について突き詰めて考えてみると、要するに「ある観点については、Aという状態や結果が望ましい」「観点Bより、観点Cのほうを重視することが望ましい」「ある状況においては、観点B、観点Cの優先順位を逆転させることが望ましい」というように、すべて「～が望ましい」という「価値判断」という形で記述することができそうに思えてくる。また「価値観」という語を辞書で引くと、

\* いかなる物事に価値を認めるかという個人個人の評価的判断 (スーパー大辞林 3.0)

\* 個人もしくは集団が世界の中の事象に対して下す価値判断の総体 (広辞苑第5版)

というような語釈が示されている(下線は引用者による)。少なくとも辞書的記述においては、「価値観」も「価値判断」の一種またはその束、としてとらえられているようである。

もしここで、単なる「価値判断」と「価値観」の間にあえて差異を求めようとするなら、

\* 「価値判断」には、ある時点・状況のみにおける一時的判断も含まれるが、「価値観」には、ある程度長期にわたり繰り返される安定した判断のみが含まれる

\* 「価値判断」は単なる「結果」であるが、「価値観」は、他の価値判断を行うにあたっての「根拠または理由」となるものである

という2点を指摘することができそうに思われる。「価値観」の定義を明らかにしていく際には、こうした差異にも十分な配慮を与えるべきものと思われる。

### 2.2.3 本論における「価値観」の定義

前節での議論を踏まえ、本論においては「価値観」を以下のように定義したい。

個人または社会集団が、ある程度安定して保有している信念の有機的・動的な体系であり、客体について、どういう状態や結果が望ましいかを判定するにあたり、意識的に根拠として用いられ、あるいは無意識的に影響を与えたりするもの

ここで「価値観」を、単なる「信念」とはせず、「信念の有機的・動的な体系」という表現によって定義することとした。その理由は前述したが、再度繰り返すと以下のとおりである。

- (1) 「存在する信念」によってのみでなく、「存在しない信念」によっても評価のあり方は影響を受けるため、価値観は「ある信念が存在しない」ということも含めた「信念の集合体全体」としてとらえる必要がある
- (2) 価値観を構成する各信念は、独立して存在するものではなく、互いの優先順位を持つ、有機的に関係しあった体系として存在する
- (3) 価値観を構成する各信念の優先順位は、状況によって動的に組み変わる可能性がある(しかしその組み換えも、ある程度安定した信念に沿って行われる)

またここでいう「信念」は、本来「価値判断」であったものが、個人または集団の中で何度も繰り返されたり、あるいは他から強く強制されたりすることによってある程度の安定性を持つにいたったものと考えることができる。さらにこの信念には、

- (a) 「基本的信念」: 客体のある観点について、ある状態・結果を望ましい(=評価規準にかなっている)と信ずること

のほか、

- (b) 「メタ的信念 I」: ある観点・評価規準より、別の観点・評価規準を優先するほうが望ましいと信ずること

- (c) 「メタ的信念Ⅱ」: ある場面においては、観点・評価規準に関するある優先順位より、別の優先順位を採用するほうが望ましいと信ずること

が含まれ、これら全体が信念の体系としての「価値観」を構成していると考えられる。

### 3. 評価の多様性を説明するための従来の試み

以上、「価値観」という概念を改めて定義しなおすとともに、関連諸概念（信念、観点、評価規準、規範等）についても整理を行ってきた。次の段階としては、個々人が評価という認知行為を行う際に準拠している「価値観」の具体的なあり方について考察を進めたい。

#### 3.1 評価プロセスモデル 概要

ここで、個々人が行っている評価の多様なあり方をとらえようとする試みの1つとして、宇佐美（2014a）の「評価プロセスモデル」の概要を紹介しておく。

宇佐美（2014a）では、日本語学習者が日本語で書いた謝罪文10編を日本語母語話者12名に読んでもらい、自分にとってどの謝罪文が好ましいか、という指示により、1位から10位までの順位付け（評価）を依頼した。個々人の評価プロセスを、プロトコル分析並びに評価プロセスについてのPAC分析インタビューによって検討したところ、評価プロセスは人によって極めて多様ではあったが、その多様性の中には一定の規則性を見出すこともまた可能であった。

具体的には、評価は「情報収集」→「解釈」→「価値判断」という基本的順序性に沿って行われていた。さらにこのうち「解釈」という行程においては、着目される対象が「文面そのもの」→「(その文章を書いた)書き手」→「(書き手と)自分(読み手)との関係性」へと推移していくということも確認された。

宇佐美（2014a）では謝罪文を評価の対象としていたため、直接観察ができるものは「文面そのもの」しかない。しかしながらその文面の内容が「謝罪」であるため、単に文面にどのようなことが書かれているかを解釈するだけでなく、「書き手がどのような人物であるか」、さらには、「その書き手が自分に対しどのような影響を及ぼすか(現在起こっている問題の解決に貢献してくれそうか、今後いいお付き合いができそうか、など)」にも解釈が及んでいく可能性がある。かつ、それぞれの解釈の行程において、着目され得る観点として複数のものを見出すこともできた。

こうした多様な評価プロセスを統一的に表現するために、宇佐美（2014a）では次ページに示すような「評価プロセスモデル」を提案した。

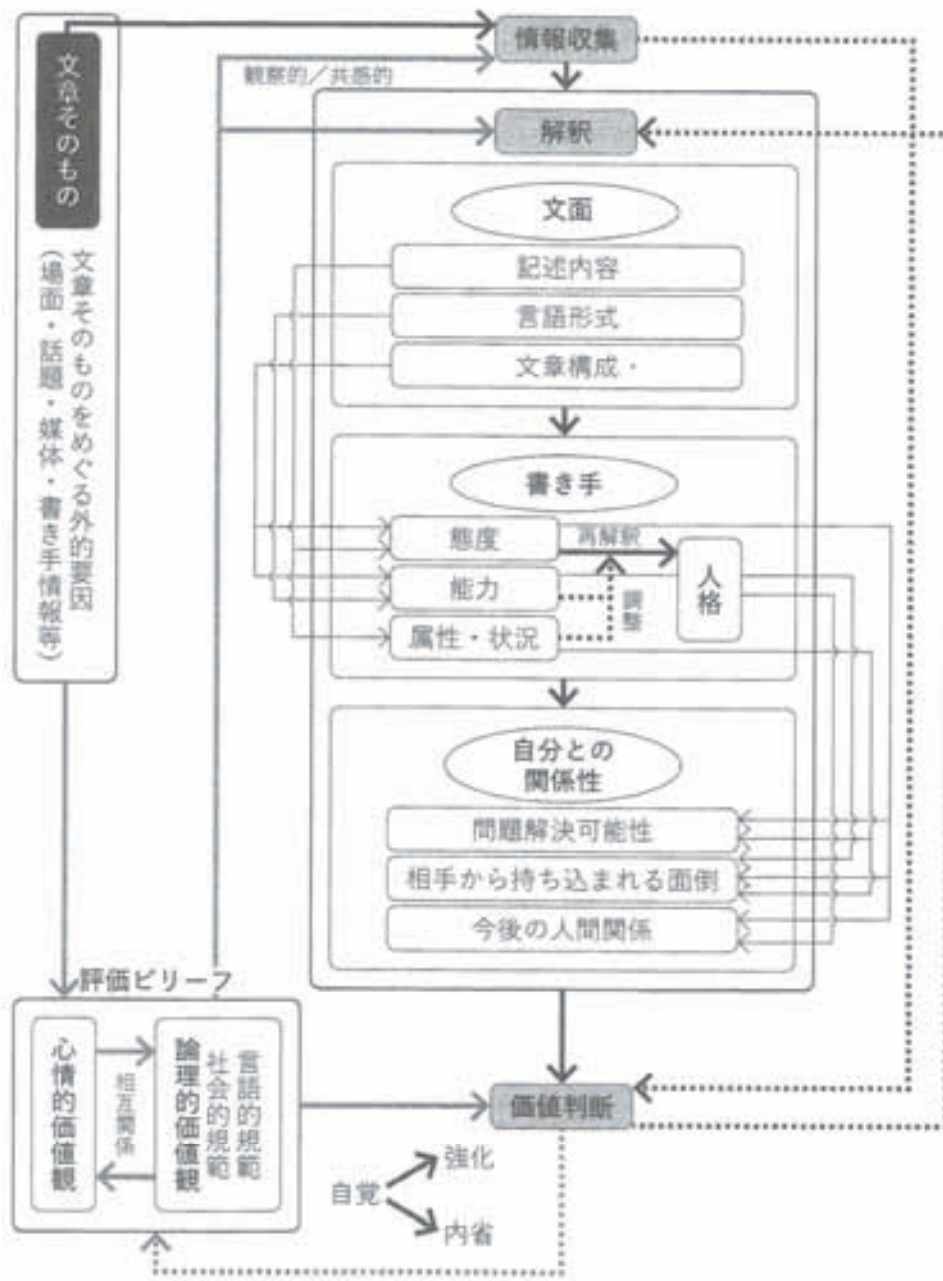


図1 評価プロセスモデル (宇佐美 2014a:314)

「評価プロセスモデル」は、謝罪文を評価するにあたり、あり得る行程、および各行程において着目され得る観点をすべて1枚の図として表現したものである。しかし現実の評価においては、これらすべての行程を通過するわけでも、またここに挙げられたすべての観点が使用されているわけではない。「文面そのもの」についてのみ解釈を行っただけで価値判断に進む評価者もいれば、「文面そのもの」「書き手」についての解釈は行いが「自分との関係性」については特に考慮しないまま先に進む評価者も見られた。また、各行程においてどの観点が使用されるかもまちまちであった。



「評価プロセスモデル」は、ひとが謝罪文を評価する際にだれもが通過するであろう行程の基本線を示しており、その意味で評価プロセスの「普遍性」を表現するものであるが、一方このモデルの構成要素の中で一部を省略・簡略化したり、逆に一部を強調したりすることによって、ある個人の評価プロセスの「個別性」を表現することもできるのである。

### 3.2 評価プロセスモデルの限界

しかしながらこのモデルは、ある個人が現実にとどのような手順で評価を行っていたか、という「現象」を説明しているのみであり、「なぜそのような手順での評価が行われるのか」という「理由」は何ら説明していない。モデルには一応「評価ビリーフ」という部門が示され（その中には「情動的価値観」と「論理的価値観」が相互に関係しあうものとして掲出されている）、この部門が評価プロセスに影響を与えるものとしているが、これらの価値観が評価プロセスにどのように関連しているのかについては明確な説明がなかった（そもそも、この2種類の価値観を設定するだけですべての現象がうまく説明できるのかも明らかでない）。評価のプロセスの多様性をたどるだけでなく、評価プロセスの背後に存在する「価値観」のありようについても、さらに踏み込んだ考察が必要であることは間違いないであろう。

## 4. 謝罪文の評価に影響を与える「価値観」とは？

筆者は宇佐美（2014a）を上梓した後も、この論文で使用した謝罪文セットをもとに、大学での授業や日本語教師に対する研修などにおいて、「評価ワークショップ」を多数開催してきた。そして一部のワークショップ（以下WS）においては、参加者からの許諾を得たうえで、WS中の発言を録音させてもらったり、WS修了後に「振り返りレポート」を書いてもらったりしている。

筆者はこれまでに、この評価ワークショップで得られたデータを用いて、WSの参加者の中にどのような気付きや変化が起こり得るのかを分析してきた（宇佐美 2014b）。本論では、2015年度の評価WSで得られたデータを用いつつ、謝罪文評価における価値観を、単に構成要素を列挙するのではなく、「構造化して示す」という試みを行いたい。

### 4.1 評価WSの概要

このWSの実施手順は以下のとおりである。

- ① **謝罪文の順位付け**：参加者に、まずは個人作業として、日本語学習者が書いた8編<sup>6</sup>の謝罪文（「ごみは夜間にではなく、朝になってから捨てるようにしてほしい」というクレームの手紙に対する返答として書かれたもの）を、「自分がそのクレームの手紙の書き手である」という想定で読んでもらい、「感じがよいか、よくないか」という基準により、1位から8位までの順位付けをしてもらう。
- ② **グループ内での順位の照らし合わせ**：参加者を4～5名程度のグループに分け、グルー

プ内で、8編の作文につけた順位を照らし合わせてもらう。

- ③ **話し合い**：それぞれの謝罪文について、「自分はなぜそのような順位にしたのか」という理由をグループ内で共有してもらう。その際、「グループとしての謝罪文の順位」を決定する必要はなく、むしろメンバーひとりひとりの「評価における考え方の違い」を確認していくよう求める。
- ④ **話し合いのまとめ**：グループ内での話し合いで得られた知見等を整理し、発表してもらう。

2015年度、筆者は都合3つの大学<sup>7</sup>において、授業の一部としてこの「評価WS」を実施し、WSでの話し合いを観察するとともに、参加者にはWS終了後に「振り返りレポート」を書いてもらっている。

この「振り返りレポート」には、参加者ひとりひとりがどのような根拠や理由に基づいて評価を行っていたか、また、グループメンバーとの話し合い、また他グループへのプレゼンテーションと質疑応答を通じてどういうことに気付いたかが記されている。この振り返りレポートを詳細に検討すると、参加者ひとりひとりが持っている信念の体系(=価値観)は、表面的には極めて雑多でありながらも、その多様性の中に「思考の補助線」を何本か入れてやることで、ある程度整理して提示する(=構造化する)ことが可能であるようにも思われる。

## 4.2 謝罪文評価における価値観構造化

### 4.2.1 「心情重視」と「合理性重視」

評価WS後の振り返りレポートを質的に検討していくと、主として「**心情に関わる観点**」(例えば、「誠意・努力が感じられるか」「読み手に安心を与え、不安を与えないか」など)について言及している参加者と、主として「**合理性に関わる観点**」(「社会的・言語的なルールを守っているか」「現在生じている問題が解決しそうか」など)について言及している参加者とが存在する、ということが確認された。以下、振り返りレポートの中から、それぞれの傾向を顕著に表す記述を引用する(下線は引用者によるものである)。

#### 【心情に関わる観点に言及した記述】

- 《1》 謝罪の心が伝わってくるか、また、改善しようという気持ちが伝わってくるか、の二点をもとに、ある程度相対的に位置付け、最終的には同程度になったもの通し(マ)を比較して順位を決定させました。(A大学)
- 《2》 今後、同じ地域の住人としてよい関係を構築・維持していけそうかを最も重視した。そのため、(中略) 積極的に関わりを持つとする姿勢が見られるものに最も高い評価をつけた。(B大学)

#### 【合理性に関わる観点に言及した記述】

- 《3》 どれだけ申し訳なさを切実に表現しているかということよりは、なぜルールが守れな

かったかの原因を明確に提示して、その原因をなくすために どのように努め、改善する意思を示してくれるかを重視した。またはどういう方法で改善させるかをどれだけ説得力のある文章で書いているかを重視した。 (B 大学)

《4》 私が最初に謝罪文の評価をしたときの基準は、主に二つある。一つ目は、朝にごみを出すというルールを守ろうという意思が見られるかどうか、二つ目は、謝罪文に不適切な表現や関係のない文章がないかどうかである。(中略) 日本で暮らすには、必要最低限ルールを守ることが快適な暮らしをすることにつながると考えた。また、謝罪するときには迷惑している人や怒っている人がいるということなので、その人たちをそれ以上刺激しないためにも、適切な日本語を使うことが重要であると考えた。

(C 大学)

《1》《2》では、「(書き手の) 心・気持ちが (読み手に) 伝わるか」「(書き手と読み手の) よい関係の構築・維持」「(読み手をよい気持ちにさせる書き手の) 態度」など、主として「人間関係において、評価者 (読み手) が快さを感じるか」ということが重視されている。一方《3》《4》では、「問題が解決するか」「社会的・言語的ルールを守っているか」のように、心情とは切り離れた論理の問題が重視されている。

こうした優先順位の違いが、ある謝罪文表現の評価結果に顕著な差異をもたらしたこともあったようである。

謝罪文の中に、一連の謝罪を記述した後、以下のような表現で締めくくったものがあった。

これから仕事が休みの時など、ゴミ置き場の掃除をお手伝いできたらいいと思います。ぜひお声をかけてください。(謝罪文 E)

ある評価者 (以下、WS に参加した学生を「評価者」と呼ぶ) は、この部分についてグループ内で顕著な意見の対立があったことを以下のように報告している。

《5》 一番意見が分かれたのは、Eさんが書いた文章で、「ゴミ置き場の掃除をお手伝い〜」の文に対して、「協調性があって好感が持てる。反省しており、逆に掃除をしようとする姿勢がいい。」といったプラスの意見と、「本当に掃除をするのかわからず、建前で感触のいいことを言っているだけ。」といったマイナスの意見に分かれました。

(C 大学)

こうした意見の対立の背後には、「心情」「合理性」のいずれを重視するかという優先順位の付け方の違いが反映しているように思われる。前者を重視する評価者にとって、この表現は「協調性」「反省の態度」を示す好ましいものと感じられる一方で、後者を重視する評価者にとっては、こうした約束は「実現可能性の裏付けがない」という理由のためにかえって疑わしいものと判断されてしまったと推測される。

一方で、「言語上のルールを守っている」ということが、評価者自ら (=読み手) の心情と関連させて言及される例も少なくなかった。以下、そのような記述例を引用する。

《6》 自分の中でランキングを付けたときには、文体や、形式に重点を置いていた。まず初めに自分について名乗っているか、や相手に対しての謝罪の言葉が初めに現れているか、など日本語の中で、ある程度フォーマットとして確立している“謝罪文の形”に沿っているか、によって順位が変化したように思う。自分ではそこまで文体や形式を重要視してランキングを付けようとは思っていなかったのだが、読んで気持ちの良い文章については高評価を、あまりいい気分にならないものについては低い評価を付けた。 (C 大学)

《6》の評価者は、意識的に「文体や形式」を重要視しようとは考えず、「読んで気持ちがいいか、そうでないか」という観点で評価を行っていたが、結果的にその評価は言語上の形式や文体によって影響を受けていた、という気付きについて語っている。

このように「ルールへの着目」は、「合理性」だけではなく、「心情」とも十分に結びつき得ることが分かる。ルールが守られる（守られない）ことで評価者が快（不快）を感じるか、という点に主たる着目点があればそれは「心情重視の観点」が活性化していることになり、ルールを守る（守らない）ことで物事が円滑に進むか（進まないか）という点に主たる着目点があればそれは「合理性重視の観点」が活性化しているということになるだろう。

#### 4.2.2 社会的規範の「厳格運用」と「開放的運用」

謝罪文を評価する際、主として「心情に関する観点」に着目するか、「合理性に関する観点」に着目するかについては、個々の評価者によって明らかな傾向性が見られる、ということは、宇佐美（2014a）においてもすでに指摘してきたことである。しかしもちろん、「心情重視」－「合理性重視」という1本の軸のみによっては、価値観の全体像をとらえるには不足である。そこで本節では、価値観の全体像をとらえるための2本目の軸として、社会的規範の「厳格運用」と「開放的運用」というものを設定してみたい。これは要するに、「社会的に認められた規範」を厳格な根拠として価値判断を行おうとするか、「規範以外の多様な要因」も考慮しつつ、その場面にふさわしい価値判断を行おうとするかの違いである。

##### ① 「心情」に関する、規範の「厳格運用」と「開放的運用」

以下のような箇所を含む謝罪文Fは、2つの点で大きく評価が分かれたようである。

ふるさとでは何時でもゴミが出せる場所だったので、こちらの町に転勤して来て、ずっと同じだとおもっていたものですから、申し訳ございませんでした。これから朝出しますように気を付けますので、宜しく願い申し上げます。やはりこの町にはかからずがいて、また犬が自由に歩いているんですね。知りませんでした。どうもすみませんでした。(謝罪文F)

1つめの対立点は、「ふるさとでは何時でもゴミが出せたので、この町も同じだと思っていた」という記述を「言い訳」ととらえるか、「事情説明」ととらえるかという点、2つ目の対立点は、「この町には犬が自由に歩いているんですね」という部分を、「謝罪文にはふさわし

くない表現」ととらえるか、一種の「歩み寄り」ととらえるか、という点であった。

《7》 討論の中で、グループ内で私だけが比較的上位に設定していたFさんの話がより多くなされたように思われる。私が「理由をきちんと説明している」と思った表現を「言い訳がましい」ととらえたり、「歩み寄りの一種の表現」と感じたもの（『やはりこの町には～』）を「謝罪文にはおかしい文面」と指摘された。（C大学）

日本社会では一般に、謝罪において「言い訳（＝できなかった理由）は述べるべきではない」ということが「規範」として共有されていると考えられる。一部の評価者は、そうした規範に従っていないという理由により、「言い訳がましい」という否定的心情反応を示していたようだ。一方で《7》の評価者は、社会的規範とは逆に、「できなかった理由を述べる」ということを肯定的にとらえていたようだ。おそらくこの評価者には、「ある失敗・不具合を繰り返さないためにはその理由を明確にすることが必要」という信念があり、そうした信念の方を既存の社会的規範より優先させていたことがうかがわれる。

また、「謝罪文においては、謝罪と直接関係ないことは書かず、できるだけ簡潔に書くべきだ」ということも社会的規範として認められる（これは、「関連性のあることを話題とすべき」とする、グライスの「関連性の公理（maxim of relation）」によっても説明できよう）。「この町では犬が自由に歩いているのですね」という書き手の気付きは、謝罪とは直接の関係はなく、グライスの公理には違反している。一方で《7》の発言をした評価者自身は、こうした規範への違反をマイナスにとらえるのではなく、謝罪文の中に自分の気付きを驚きとともに書き加えることを、一種の「歩み寄り」としてプラスに評価しているのである。

また別の評価者は、話し合いを通じ、「誠意」という心情的なもののとらえ方が変化したということ、以下のように語っている。

《8》 「誠意」というのは捉え方次第なんだなと感じました。私は「誠意」を謝罪文にふさわしい文体を用いているか、また結局ゴミを朝出すのかななどの観点で判断していましたが、変に友好的だと感じられた文章も、これからも対話を続けていこうとする努力だととらえれば評価できるし、たどたどしい日本語も必死に伝えようとしていることが分かってきました。（B大学）

この評価者は、「誠意」という心情的要素の有無を、当初は「規範に従っているか」によってのみ判定しようとしていた（＝規範を厳格に運用していた）ようである。しかし話し合いを経る中で、表面的には規範に沿っていなくても、その背後に「対話を続けていこうとする努力」「必死に伝えようとする思い」（つまり「誠意」）を読み取るようになっていく。しかしそれは、この評価者にとって規範が不要なものになった、ということではないだろう。「適切な表現を取るべき」「社会的ルールは守るべき」という規範意識は残したまま、それを絶対視することなく、「規範遵守」以外のことから「誠意」の有無を判定することができるようになった（＝規範を開放的に運用するようになった）ものと考えられる。

## ② 合理的判断における規範の「厳格運用」と「開放的運用」

前節で引用した例は、規範と心情との関わりについて言及したものであったが、「問題が解決できるかどうか」という合理的判断において、規範の扱いに違いが見出せる例も見られた。

謝罪文のひとつに、以下のような部分を持つものがあった。

山田さんの話は分かりますけど私の仕事は夜遅くまでするので朝にゴミを捨てる時間を合うのがほんとにたいへんです。それで話した問題が起こらないように私のゴミは鉄の桶みたいなに入れて捨てるのはよろしいでしょうか。(謝罪文H)

この箇所について、評価が大きく分かれたという報告が複数の参加者からなされていた。以下のようなコメントがその典型例である。

《9》 文章Hの「鉄の桶」の提案をどう評価するかはメンバーによって大きく変わってきました。(中略)「鉄の桶」を新たな提案を積極的にしていると捉えるか、みな共通して守っているルールを守る努力をしていないと捉えるかによって大きく評価が割れましたが、否定的に捉えている意見が多かったです。(B大学)

つまり、「ごみは朝出すべき」というルール(規範)がある以上、それは守るべきだ、という考え方がある一方で、「要するに犬やカラスによって生ごみが荒らされなくなる」ということが問題解決のあり方なのであれば、「ごみをしっかりした容器に入れて出す」という提案も、それはそれで理にかなったものである、という考え方の間に対立があったことが窺える。まさにこれは、「規範がある以上それは必ず守るのがよい」という信念と、「規範以外の問題解決方法も考慮してよい」という信念との対立を顕著に表しているといえるだろう。

## 5. 総括

### 5.1 「価値観模式図」の提案

ここまでで、非母語話者の書いた謝罪文を評価する際、それぞれの評価者が採っている「基本の方針」として、

① 「心情」を重視するのか「合理性」を重視するのか

② 規範を「厳格に運用」するのか「開放的に運用」するのか

という2つの軸を提案した。また前節においては、この2軸を構成する極性の組み合わせにはすべてのもの(心情×厳格、心情×開放的、合理性×厳格、合理性×開放的)があり得ることを示してきた。つまりこの2軸は互いに独立したものであると考えられるため、謝罪文を評価する際の「価値観」は、全体としてこの2軸を掛け合わせた、図2のような模式図によって表現することができるだろう。

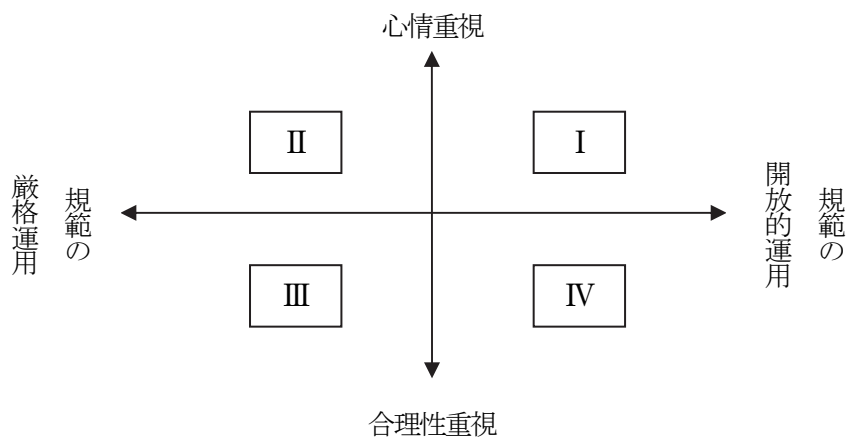


図2 謝罪文評価の際に準拠する価値観 模式図

図2の縦軸は、「評価を行うにあたり、どういう観点から情報収集を行うのか」を示している。「快さを感じるか」という心情的な観点から情報収集を行うケースはこの図の上部に、逆に「事態が改善するか」という合理的な観点から情報収集を行うケースにはこの図の下部にプロットされることになる。

またどういう観点をを用いるにせよ、評価の最終段階である価値判断は、「これこれという結果・状態であるべきである」という「規範」に照らして行われることになるだろう。しかしその規範が、「どの程度厳密に守られようとするか」はケースによって異なる。

図2の横軸は、「規範」をどの程度「固い」ものとしてとらえているかを示している。既存の規範が常に厳密に守られようとするケースはこの図の左端に、規範が状況に応じて調整されながら運用されていくようなケースはこの図の右端にプロットされることになる。

## 5.2 模式図上への評価事例の当てはめ

この図上に、実際の評価の実例を当てはめてみよう。

例えば《9》の発話では、「状況がいかんして改善されるか」について議論が行われているため、もっぱら「合理性」という観点が活性化しているものと考えられる。しかし既存の「規範」をどの程度厳密に守るべきと考えるかは、評価者によって異なっていたようである。「既存のルールを守ることが問題の解決につながる、と考える評価者」は図2の第Ⅲ象限に、「ごみを鉄の桶に入れて出すのはどうですか」という提案を好意的に解釈する評価者は第Ⅳ象限にフォーカスを当てている、と考えることができるだろう。

また《8》の評価者は、「誠意」「努力」という語を多用しているところから、もっぱら心情的な観点から情報収集を行っていたものと推測される。そしてこの評価者は、最初は既存の言語的・社会的規範を比較的厳格に運用していたようであったが、他のグループメンバーとの話し合いを経て、規範を厳格にではなく、開放的に活用することができるようになったと

述べている。つまり、評価における価値観のフォーカスが、上図の第Ⅱ象限から第Ⅰ象限へと推移していった、ということになるだろう。

### 5.3 「価値観模式図」が表現するもの

最後に、誤解のないように強調しておきたいのだが、この模式図は決して価値観そのものや評価者を「分類・類型化」するためのものではない、ということに注意されたい。

評価を行う際、心情に関わる観点が活性化されやすいのか、また合理性に関わる観点が活性化されやすいのかは、ひとによってある程度決まっているかもしれない。しかしながら、心情に関わる観点が活性化されやすい評価者が、合理性に基づく情報収集がまったくできない、ということではもちろんない。ひとは状況に応じて、情報収集にあたっての観点を切り替えることはできるはずである。規範を厳格に使うか、開放的に使うか、という軸についてもまったく同じことが言える。現に、《8》の発話者に見られたように、他者との話し合いにより、厳格な運用から開放的な運用へと変化していくということもあり得るのである。

つまり、個々の評価者がこの4象限のどこかに固定されている、というとらえ方をすべきではなく、むしろ、どの評価者の心の中にもこの4つの象限は存在しており、場面によってどの象限にフォーカスが当たるかが切り替わりうる、というようにとらえるのが適切と考えられる。この図は、ある評価者がある状況において評価を行う際、価値観の全体像の中で「いまどの部分が活性化しているのか」を内省するために活用されるのが望ましいと考える。

とはいえ今回の模式図によって、価値観の全体像が十全にとらえられたというわけではもちろんない。今回の模式図は、「非母語話者の書いた謝罪文を評価する」という場面において、評価者ひとりひとりの発話のなかから垣間見えた「価値観の多様なありよう」に対し、仮に2本の補助線を入れることにより整理を試みたものに過ぎない。異なるデータを用いて分析を行えば、また異なる補助線が得られる可能性があるだろう。

ひとによって「価値観」は多様、というのはその通りである。しかし多様である、ということを経験しすぎると、「価値観が違うのだから理解しあえないのはやむを得ない」という発想になってしまう可能性があり、それは不毛な議論でしかない。一見、収集がつかないほど多様に見える価値観を、「多様である」と言って済ませるのでなく、可能な限り共通の土俵に載せて統一的に説明しようとする——そうした試みこそが、多様な価値観を共存させるために不可欠なものであり、本論の試みもその一端に位置付けられるものなのである。

注

<sup>1</sup> ここで「情報収集」とは、「言語表現等の形で明示的に与えられている情報を素直に受け入れる」という段階を、「解釈」とは、「評価者独自の認知的操作により、言語表現としては明



示的には与えられていない情報を読み取るが、価値に関係する判断は行わない」という段階を、さらに「価値判断」とは、「「情報収集」「解釈」によって得られた情報に対し、それが主体にとって望ましいものであるかどうかを決定する」という段階を指す(宇佐美 2013: 127)。

<sup>2</sup> ここで「欲求」とは、「道徳的・芸術的・社会的欲求を含むあらゆる分野において、あるものを「望ましい」とする傾向のすべて」を指す(見田 1966: 17)。

<sup>3</sup> Oxford Advanced Learner's Dictionary には、value の語釈として “the quality of being useful or important” とともに “beliefs about what is right and wrong and what is important in life” が挙げられている(下線は引用者による)。

<sup>4</sup> ここでいう「客体」には、主体からみた「自分自身」が含まれることもある。「自己評価」とは、評価の主体が自分自身を客体と見て、それに対して望ましさを判定をしているものと考えることができる。

<sup>5</sup> 一般に「評価規準」とは、ある観点についての「好ましい状態(到達目標)」を記述したものとされるのに対し、「評価基準」とは、「規準」への到達段階をいくつかの水準に分けたとき、「どういう条件が満たされればどの水準にあるものとみなすことができるか」を記述したものとされ、前者を「のりじゅん」、後者を「もとじゅん」と呼び分けることもある。

<sup>6</sup> 宇佐美(2014a)では10編の謝罪文を使用していたが、実際には8編の謝罪文でもほぼ同様の効果が得られることが確認されたため、現在は8編の謝罪文で実施することが多い。

<sup>7</sup> 2校(A大学、B大学)は首都圏の、1校(C大学)は中部地方の大学であり、授業はいずれも学部2~4年生を主たる対象としていた。履修者は20~30名程度である。評価WSでは通常、1コマ90~105分の授業を3コマ程度使用して実施している。

## 参考文献

- (1) 宇佐美洋(2014a)『「非母語話者の日本語」は、どのように評価されているか—評価プロセスの多様性をとらえることの意義』ココ出版
- (2) 宇佐美洋(2014b)「自らの評価価値観を内省するための活動—評価の個別性を尊重するところから始まる新しい教育観—」『ヨーロッパ日本語教育』18、199-204.
- (3) 宇佐美洋(2016)「人間探求のための「評価」、という新しい視点」宇佐美洋・編『「評価」を持って街に出よう』、序章、くろしお出版、1-15.
- (4) 見田宗介(1966)『価値意識の理論』弘文堂新社
- (5) Kluckhohn, C. (1951) Values and Value Orientations in the Theory of Action, In T. Parsons, & E. A. Shils (Eds.), *Toward a General Theory of Action*. Cambridge, MA: Harvard University Press. 388-433.
- (6) Rokeach, M. (1973) *The Nature of Human Values*. New York: Free Press.

How can the “sense of value” in evaluation be defined and schematized?:  
In the case of the evaluation of letters of apology

USAMI Yo

The “sense of value” of individual evaluators is the most important determiner of their evaluation, the act of judging. Previous studies, however, have not provided an adequate definition of sense of value. In this study, the author sought to give a clear definition of notion of sense of value, and those of other related notions. The author also constructed a “schematic diagram” of the sense of value in the Japanese native speakers’ evaluation of the letters of apology written by non-native speakers. In the diagram, the following two axes were utilized for classification: 1) whether “feeling” or “rationality” takes precedence in evaluation, and 2) whether the social norm is utilized “rigidly” or “openly”.

**【Keywords】** feeling, rationality, evaluation standards, rigid-utilization of norm, open-utilization of norm